

当事者の視点に立つということ : 痴呆老人が創造する世界

著者名(日)	阿保 順子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	1
号	1
ページ	7-10
発行年	2005-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006884/

当事者の視点に立つということ ―痴呆老人が創造する世界―

阿保順子

北海道医療大学看護福祉学部

はじめに

一人の人間が、他の人間に起こっていることを理解するとはどういうことでしょうか。他の人々の体験を、自分自身のこれまでの生活体験に引き寄せて考えてみることで、多少は理解できると思います。病んでいる人々を理解することは、看護や福祉の基本です。ですが、私たちの日常的な体験から想像して見るのが不可能だと思える事態に陥っている人々を理解することは、簡単なことではありません。当事者たちから見えている世界に添って見ないと、彼らの心も体も行動も理解することはできないでしょう。だからといって、私たちは、他者を完璧に理解することは不可能です。ですから、理解というのは、理解しようとする、そのプロセスの中にしか生起してきません。

今回の講演では、痴呆という障がいを負っている当事者の視点に立とうとするプロセスにおいて、見えてきたことがらと、そのことが何を意味しているのかについてお話ししてみようと思います。なお、これからお話しするのは、ある痴呆専門病棟での長い間の参加観察をもとにしてまとめた拙著『痴呆老人が創造する世界』に記したものの一部であります。

いくつかの背景を記述しておきます。登場する人々は、精神病院内の痴呆専門病棟に入院していた患者さんたちです。ここの病棟は、現時点から見ても痴呆の人々へのケア水準は高かったと言えるでしょう。三カ月で一旦は退院させるという規則がありました。しかし、実際には重度の痴呆状態にある患者さんが大半を占めるため、一旦は退院するものの、再入院になるケースが多く、なかには他の施設へ移る人もいます。だから入れ替わりは結構激しくは見えますが、見知った患者さんが多いのです。男女比率はおよそ三対一の割合で、もちろん女性が多いです。

患者さんたちの知的機能については、重症度の高い人たちがほとんどです。食事や排泄、更衣や清潔などの日常生活行動は、人によってさまざまですが、大半は部分的な介助を必要としました。食事も、介助を要する人が多く、お箸をもたせても、それが何なのか

からない人や、もたせても手づかみで食べようとする人、飲込みが悪く時間を要する人などさまざまでした。排泄がだめな人たちは、およそ三分の一を占めていました。見当識にいたっては、ほとんどの老人が障害されており、ここが病院であることをわかっている人は数人しかおりませんでした。身体機能は一応は歩行可能な人に限られてはいますが、平均年齢がおよそ79歳であるため、少々の不自由は容認されていました。日中、患者さんたちは、具合の悪い人を除き、全員がデイルームに集められていました。また、家族の面会がチラホラとありました。それをこころ待ちにしている人もあれば、家族が来てそれを認知できない人もいました。

1. 痴呆老人の社会関係

痴呆老人どうしの関係はさまざまです。ここでは、一組だけ観察された仲間関係の内実や、虚構としての夫婦関係や友人関係など、彼らが形成していた個人的な関係についてお話しします。そして、彼らの関係性が、通常の社会の現実からすれば虚構であり、一方通行的であるにもかかわらず、そのことが彼らに容認されているのはなぜかについての考察も述べたいと思います。

成立していた仲間関係

ここでは、世間の目を気にしながらもたくましく生きる4人の仲間たちを紹介します。

専門家の間でよく言われるのは、痴呆老人たちは馴染みの関係によって安定するということです。ですが、安定とか馴染みの関係というのがどれくらいのレベルを指すのかについては、実を言うとあまり知られていません。というのも、知的機能が極端に障害されている場合、最も難しいと考えられるのが対人関係にほかならないからです。言葉の意味が失われていく痴呆老人たちが、言葉に頼らないで、対人関係を取り結んでいくことの大変さは、容易に想像できるでしょう。それでも、彼らは他人とかわるし、一般的に言われているほど多くはないにしろ、仲間関係を築いているのです。

仲間はいつも一緒にいて、一緒に行動しますが、仲間以外の人々と自分達は違うと考えています。四人で構成されている仲間は、大将がYさん、78歳の性格

<連絡先>

阿保 順子

〒061-0293 当別町金沢 1757

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

明朗にして一見穏やかな元主婦です。ナンバー2がNさん76歳。彼女は、大将の参謀です。彼女たちに比べればかなり劣位に甘んじているのがあとの二人、Tさん69歳とSさん79歳です。YさんとNさんは、基本的な日常生活行動はほとんど一人でできますし、言葉も話題を提供したり、ある行動を指示したりすることもできます。だが、TさんとSさんは、食事から排泄、更衣、あるいは洗面や歯磨き、入浴でもかなりの程度手伝わないと自分ではできません。特徴的なのは、Tさんは言葉のほとんどが相手に同意する形しか出てこないことです。相手の話しの文脈は多少わかるのですが、内容に対して器用に言葉を添えていくことができません。だから、いつもただただ頷き、同意してしまうのです。Tさんは、和裁などをして家庭で過ごしていましたが、アルツハイマー型痴呆のために60歳代で発病し、入退院を繰り返しています。Sさんは、Tさんよりも言葉は出てきません。頷くというパフォーマンスに、感嘆詞だけで、意味を伝える語彙のほとんどが失われています。

四人は、仲間関係にありがちな仲間はずしをします。仲間の暗黙のルールに違反することが起きるからです。それは結構残酷です。彼女たちはまた、仲間としての共通の行動をとります。いつも一緒に、一日5~6回はトイレへと散歩します。便器をのぞき込んで感嘆の声を上げ、水道の蛇口に触れては、突然に噴出する水に驚き、まるでトイレ探検隊のようです。探検から帰って自分たちのお気に入りのテーブルにつく前には、必ず椅子とテーブルを持ち上げます。位置をずらそうとか、別な場所に移そうとかと考えているわけではないようです。自分たちがいない間に見知らぬ人が侵入している可能性を肌で感じ取っているのだと思います。留守宅の匂いが気になるといったところでしょうか。そのほかにも、自分たちのテリトリーに他の患者さんが勝手に入り込んでくようとすると、「許しません」と言わんばかりに侵入者を排除します。さらに彼女たちは、自分たち仲間関係にある人々以外の他の患者さんたちを世間一般にみだてています。

彼女たちを見ていると、自己というものが確かに他者を通じて形成されるものであることに思い至ります。明治や大正に生まれた人々の超自我つまりスーパーエゴの強さは、われわれのような昭和も戦後生まれの者とは到底比べものになりません。修身や道徳という言葉以前に、暮しの中でのしつけがあり、それが生活の隅々まで行き渡っていたのでしょう。彼女たちは自分たち以外の老人を見てさまざまな批判をします。他者の行いの中に、自分の姿を重ね併せることでスーパーエゴ機能が発動されることとなります。「人のふり見てわがふり直せ」です。逆も真なりで、彼女たちは、他人の批判もしますが、自分たちも批判されることのないように、非常なる気遣いをしながら暮ら

しているのです。

パーソナルな関係設定

痴呆化が進んでいるとはいえ、人それぞれの個性が失われていくわけではありません。事態は逆です。周知のことですが、女性は男性と比べてよく他者とかわります。男性は人数が少ないことも手伝ってか、ロンリーマンを決め込んでいるように見えます。しかし、男性であっても、よくよく彼らの交流場面を観察したり、個人的に話しかけていくと、それぞれにパーソナルな関係とでも言えるような個別の関係を設定していることがわかります。ここで紹介するのは、彼女、彼らが繰り返しているかわりの場面で見いだされたパーソナルな関係についてです。

まずは夫婦関係です。このお話は複雑です。Kさん(女性)はAさん(男性)を自分の夫であると信じています。このAさんを、別の女性Mさんも自分の夫だと思っているのです。そして、KさんにとってAさんは、わがままで手のかかる困った人で、できるならかわりたくない夫のようです。ところがMさんにとってのAさんは、いたわってあげたい、かわいいご亭主なのです。さらに、このMさんを別の男性Jさんが、自分の妻だと信じているのです。なんともはや複雑な関係が設定されていました。いずれも、一方通行的な関係設定で、もちろん、虚構の関係ではありません。しかし、彼ら彼女らにとっては、事実なのです。

こういったフィクションとしての関係性は、夫婦関係に限られません。保護する人とされる人、お互いに強い信頼関係でつながれていると信じている人などさまざまです。もちろん、そのようなパーソナルな関係もまた一方通行的です。保護する人であるHさんは、保護される人Rさんが他の施設に移ってしまった後、ご飯もろくに食わず、めっきり動かなくなりました。それまで、よくやっていた病棟での行商(Hさんは、病気になるまで、ずっと行商をして生計をたててきた)もすることがなくなってしまいました。心にポツカリと穴があいたという表現が妙にピッタリして、悲しかったのを覚えています。

虚構と現実

なぜこのような一方通行的ないわば仮の関係が設定されているのでしょうか。次のように言うことができます。

夫や妻は、生活の中心を占める特別な人々であり、彼らなしに虚構の現実生活は成立しないからと。痴呆老人たちは、関係性の真偽や詳細に深入りすれば、せっかく作り上げたバーチャルリアリティの世界が消滅してしまうことを知っています。そうすれば感情において自分をしっかりと確認させてくれる妻や夫を失ってしまいます。彼らは、だから、内実は不問に伏すこと

によって、妻である夫であるという自分との関係の輪郭だけを残そうとします。ある側面から見れば、こういった暮らしへの向き合い方は、老練な大人の分別あるいは生き延びる知恵ともとれるのです。そう考えると、彼らは、言葉には出しませんが、たぶん、さまざまに我慢をし、苦悩しているとも考えられます。その逆に、彼らは、そういった我慢や苦悩の内容を不問に伏すことによって、戸惑いながらも仮の現実を作り上げ、そこでの生活を実に「うまく」生きているとも考えられるのです。

このことは、その社会に暮らす人々が、さまざまな事柄を同じように了解し、同じように守り、同じように感じとるような仕組みによって、社会が構成されているのであり、その構成の仕方は人間の思いつきによるものであることを物語っています。暗黙のうちに身につけている常識が、その構成された社会の維持に絶対的に必要とされるのです。だから、そこには、「絶対的な正しさ」や「絶対的な確かさ」は存在しません。あるのは、「正しいらしい」「確からしい」というレベルの相対性だけです。われわれもまた痴呆老人と本質的には同じ虚構の現実、フィクションとしてのリアリティの中で生活していると言えば、言い過ぎでしょうか。

2. 交わされている会話

痴呆に陥っていきますと、言葉の意味が次第に失われていきます。だからといって、彼らが他者と関わらないかということ、決してそうではありません。彼らの間で繰り広げられている会話は、コミュニケーションの本質とは何かを考えさせてくれます。

彼らのコミュニケーションは、言葉の意味が失われていく段階に応じて、3種類に分けられます。ここでは、その会話の三つの形式について紹介し、それが彼らの生活においてどのような意味をもつのかについてお話しします。

会話は、他者を抜きにしては成立しません。独り言とて、自分をもう一人の自分にみたてて行う会話なのです。一般にそれは、言葉を介しての意味が伝わるのが第一義であると考えられています。しかし、思いのほか、言葉による意味の交換という事態は、会話にとってそれほど重要ではありません。表情や身振りや伝えようとする必死さ、あるいは行動などが意外に大切な役割を果しているものです。言葉の数そのものが失われていくばかりか、言葉の意味がどんどん抜け落ちていく痴呆老人たちは、こういった言葉以外のものを巧みに使いこなすテクニックというものをいつのまにか身につけています。

言葉は、一気に抜け落ちてしまうというものではありません。ものには順序があり段階があります。彼らの会話は三段階に分類できます。いま述べたよ

うに、言葉の意味が抜け落ちていくために、話の内容がチンプンカンプンになっていきます。言葉の意味がかすかに存在している場合、途中からどこかおかしいという感覚にとらわれていく会話になります。だから一生懸命その話の辻褃合わせをしようとし、ますます深みにはまり怪しさも増していきま。だから、話しても話しても不快感がつきまとい、彼らの話に終わりというものが訪れません。疲れる会話が成立します。

ですが、疲れる会話にも、その次の段階にも、共通して残っていることがあります。それが会話の形です。この段階の会話は、決して言葉の意味が共有されているわけではありません。かかわるという形が大切にされており、価値が置かれるのは「いい雰囲気」です。「連想ゲーム」とか「しりとり遊び」は昔からありました。言葉の意味を抜いたり、新しい意味を加えたり、あるいは新しい言葉を造ったりするのは結構楽しいことです。言葉は人間の発明品なのです。

最も抽象度の高い会話は、かかわりたいのだが、言葉はもちろん身振り手振りを駆使しても如何ともしがたい会話とでも言えるようなものです。老人たちは、関与することだけで精一杯、それ以上はお手上げになってしまいます。

悲しいかな、この先には、言葉はもはやありません。でも、考えようによっては、もっと言葉よりもすばらしいものにたどり着くのかもしれません。山登りは八合目くらいになると疲労がピークに達し、言葉少なにはなるらしいのですが、頂上を極めた時、その感動に言葉は必要がなくなるようです。

日常的な挨拶は、特段、意味を伝えようとしているわけではありません。関係性の反映、ないしは創造なのです。痴呆老人の、「かかわるという形」を大切にしたい会話もまた、その延長線上にあります。痴呆老人の会話が異様さを感じさせるのは、形が肥大化しているために、違和感が露呈されてしまうからなのです。

3. 行動の意味

行動というのは、何も目的的な動きだけではありません。私たちは、目的を欠いているような行動をとっていることが多々あります。痴呆老人たちがとっている行動をよく観察しますと、確かに何かの目的をもっていると見えることから、一見して、目的を欠いていると映るような行動までさまざまです。しかし、そのような行動によくよくつきあってみると、そこには、彼らの社会性や社交性が見事に体现されていることに気づきます。今回は、空っぽのゴミ拾い行動を取り上げ、その意味についてお話しします。

老人になるとどうしても視線は下、つまり床に向けられます。大なり小なり腰は曲がってくるためです。病棟の床というのは、さまざまな色彩の幾何学模様のリノリウムです。また、老人たちはトイレトペーパーを大切に懐に保管しています。排泄時に使用するペーパーをその都度渡されるのですが、昔の人たちですと1回に使い切るというもったいないことはしません。必ず少しづつ余しておいてそれを懐に貯蓄しているのです。特に私物の携帯は禁止されていますので、スリッパやこのトイレトペーパーは大事な私物としての意味を持ちます。女性にとってこのトイレトペーパーは、単なる排泄時使用の物品ではありません。こよりになったり、手紙になったりと、ペーパーは八面六臂の活躍をするために、その切れ端が床に落ちてしまうのです。白い物は目立ちます。老人たちは、これを拾うのです。そのほかにも、白い物としてはご飯粒があります。きれいに掃除はされているのですが、なにせ3食をダイルムで食べるわけですからご飯粒もけっこう床に落ちています。これも老人たちの収集物になります。実際に落ちているこういった白い物を拾うのは誰でも了解できます。

しかし、老人たちは時に空っぽのごみを拾います。何かを拾うしぐさなのですが、そこに実物はないのです。いわば空っぽのごみです。さらに、驚いたことに、空っぽのごみを他の老人や私にもくれるのです。それはまるで大切な贈り物であるかのようです。ですから贈られた人もまた、それを大事に懐にしまうしぐさをするのです。拾う、渡す、受け取るといった一連の行為が何の不思議さも奇妙さもなしに行われているのです。

拾うとかつまむといった行為は類人猿でも見られるそうです。しかし類人猿は決してそれを他の類人猿に渡しはしません。贈る、贈られるといった事態にこそ人間の行為としての意味がありそうです。つまり、空っぽのごみは、人と人を結ぶ媒体なのです。彼らは、何を贈るかといった内容を抜きにして、贈る、贈られるという贈与の形を残しているのです。それが対人関係を取り結び重要な方法であることは、私たちの日常生活と同じであると言えます。

まとめ

痴呆老人たちは失われてしまった現実の世界の常識をいったん解体させ、新しい常識を創っているかに見えます。常識とはある一つの視点にすぎません。痴呆老人の世界は、彼らの視点によって創造されている、いわば、中身を不問に付し、輪郭だけで成り立つ影絵のような世界であると言えるかもしれません。

彼らの視点に立とうとする努力において、彼らが創りあげている常識の世界の理解という事態が生起してくると思います。

受付・受理：2005年1月14日